第 25 回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会（ホール審査）総評
コンチェルト C 部門

●審査員 A
今回も昨年と同様にカルテットをポーランドから迎え、参加者 5 人共に短時間でよく頑張って合わせていたと思います。１番が３名、２番が２名でしたが、全楽章を安定した技術力、豊かな表現力をもって弾きこなされていたと思います。今後も更に研鑽を積んで頂きたいものです。

●審査員 B
この部門のレベルはさまざまだったように思います。最高の芸術的レベルに達した演奏が一つありましたが、それ以外は、いくつかの点では非常に優れていましたが、欠けていた点もいくつかありました。以下を心がけてみてください。
①楽譜に書かれているすべての要素、すなわち音、リズム、強弱、アーティキュレーション、フレージングを正確に読み取りましょう（各フレーズには、大小問わず何らかのクライマックスがあるべきでしょう）。
②主旋律は声楽のブレスを意識した適切なフレージング、そしてモルト・レガートで弾きましょう。
③華やかなブリランテの特徴をできるだけ明確に示し、硬く重い演奏を避けましょう。決して無理に音を出すのではなく、指を更に駆使しましょう。
④作曲家が記譜した強弱記号を尊重しましょう（p は pp とは異なります）。
⑤ペダルの使い過ぎに気をつけましょう。

カルテットと演奏するときには、特に以下のことに気をつけてみて下さい。
①アンサンブルのパートをよく知っておきましょう（暗譜するぐらいの気持ちで）
②フレーズのブレスの合わせ方、そして弦楽器は音を出すのに必要な時間がピアノとは異なるので、決してアンサンブルの音を追い越さないようにしましょう
③丸みを帯びた音を意識しましょう。無理に弾き、重く鋭くなってしまわないようにしましょう。
④アゴーギグの変化はカルテットにも理解できるものである必要があります。唐突な表現は避けましょう。

何よりも、常にアンサンブルを楽しみましょう。あなたがそれを示すことができれば、彼らは更にあなたを助けたいと思い、よい演奏をしてくれます。一緒に音楽を創るのです。成功を祈っています！

●審査員Ｃ
素晴らしい演奏をありがとうございました！
トスカニーニとの会話の中で、G.マーラーは彼に「楽譜の中にはエッセンシャルなもの以外はすべて書かれている」と言いました。この「エッセンシャル」を探すことは、非常に複雑且つ興味深い作業です。
もし何かアドバイスできるとすれば、普段の練習（音色、ペダリング、フレージング、音楽構成など）と並行して、更に内容について考えてみてください。

●審査員Ｄ
コンチェルトという作曲家の最も大きい作品を演奏するにあたり、どう弾くかというのはピアニスト個人の自由ではありますが、弦楽の方々との共演の場でありますので、ソロとは違う独自の課題があるように思いました。その中で、室内楽的な感覚がみられる興味深い内容の演奏がありよかったと思います。

●審査員Ｅ
以前にも増して出場者たちがよく弾けるようになってきており、かなり僅かの差による審査結果になった模様です。特に嬉しく思われたのは、単に演奏のレベルが上がってきただけでなく、演奏者たちがショパンの音楽の様式感をよく理解し、それを適切に捉えた演奏を聴かせていた事実です。出場者たちの演奏は、本場のポーランド人たちからみても違和感のないものであったに違いなく、このことは、日本の音楽文化のレベルそれ自体が上がってきたことの証明であると考えてよいでしょう。

●審査員Ｆ
アンサンブルは皆さんよかったと思います。弦楽四重奏がピアノの前にいるので、その音を超えて美しく響かせるのは難しいですが、コンチェルト（オーケストラ）はそれより音量が大きいです。音のよく響く人、室内楽的合奏感がある演奏がよかったと思います。